

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月21日現在

機関番号：13301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720258

研究課題名（和文） 地域概念としての「東三省」の形成過程からみた
清代後期マンチュリアの政治・社会変動研究課題名（英文） Historical Changes in Qing Manchuria: A Survey on the Usage of
the Term 'Dong-san-sheng' in Qing Documents

研究代表者

古市 大輔 (FURUICHI DAISUKE)

金沢大学・歴史言語文化学系・准教授

研究者番号：40293328

研究成果の概要（和文）：

本研究では主に、清代のマンチュリアを指す地域呼称（特に「東三省」の語）を含む記事を清代諸史料から抽出し、それらの用法とその時期的変遷に関する確認・分析を行なった。その結果、以下のことが明らかになった。1）清代前期には、清朝は基本的に「東三省」の語を領域的・空間的な概念を示すものとしてではなく、ある特定の人的集団を指す語として用いていた。2）19世紀に入る頃からは徐々に、「東三省」の語が領域的・空間的な意味合いを含む語としても次第に用いられつつあった。3）マンチュリアという地域に対する清朝やその官僚の認識は基本的に、三將軍の管轄区域それぞれを基本的な枠組みとするものであったが、19世紀に入ると、その上位概念として「東三省」という地域概念も形成され始めていった。

研究成果の概要（英文）：

In this research, I picked up some terms which meant the Qing Manchuria, in particular, the term 'Dong-san-sheng', from the Qing documents, and analyzed the usage of the terms and its historical changes during the Qing period. I have some remarks as follows. 1) In the first half of the period, the Qing dynasty used the term 'Dong-san-sheng' not as a place-name of Manchuria but as the name of a group of Manchu bannermen in Manchuria. 2) However, after the beginning of the 19th century, the term began to be used as a place-name of Manchuria as well. 3) In the second half of the Qing period, Manchuria began to be regarded as a region called 'Dong-san-sheng', as well as a mix of the three provinces in Manchuria: Mukden, Jilin and Heilongjiang.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：東洋史，マンチュリア，東三省，清代，社会変動

1. 研究開始当初の背景

報告者（古市）はこれまで、清代後期のマンチュリア（特に当該地域南部に位置する盛京）の社会・経済変動とその特色を、それへの対応策として 19 世紀後半に断行された清朝の行政改革という政治面での動きに注目しつつ検討を進めてきた。

盛京における清朝の行政的対応の特徴やその変容を検討してきたことを基礎に、近年は、そうした行政的対応の基本的理念に少なからず影響していたであろう清朝のマンチュリアという地域への認識にも注目し始め、さらに、研究対象とする時期を 19 世紀後半から 20 世紀初頭の清最末期にも広げ、当時のマンチュリアで断行されていた行政改革としての「東三省建省」に対する再検討を試み始めた。そうした試みについては、報告者の 2 つの論文、「清末、中国東北における官制改革の推進と東三省建省」(2008 年 1 月)、及び「清代光緒年間の東三省練軍整備計画とその背景」(2008 年 2 月)でその端緒を記した。

その二つの論文のなかで、報告者は以下のことを指摘した。第一に、「東三省」の語の起源やその地域呼称への転化などに関する歴史的考察は未だに不十分であり、その語の起源についてはいくらかの言及があるものの、その後も、管見の限りでは自覚的に論じられたものはない。第二に、「東三省」の語の地域呼称の使用に関しては、一部の成果を除き、これまでの研究成果ではほぼ、その正式な使用の開始時期として 1907 年の「東三省総督」の設置と「東三省建省」に注目してきただけであった。第三に、しかし、歴史事実としては、清朝によるその語の地域呼称としての使用は、朝鮮問題に代表される 19 世紀後半の東アジア国際関係が大きな変動を経験した時期にすでになされていた。

この指摘を土台に、報告者は、「東三省」の語に関して本研究でさらなる実証的な研究を推進できれば、清代マンチュリアにおける歴史的展開とそのありかた・方向性に関する新たな知見と議論の可能性を加えることが出来るはずであると確信した。

そのうえで、「東三省」という地域概念の歴史的過程や、その過程が表現している清朝のマンチュリアという地域に対する認識の変化、並びに当該地域の社会・経済的変動のありように対する検討を進め、清代マンチュリアにおける歴史変動の過程を新たな視点から理解することを試みたいと思うようになり、またその試みも十分可能であると思うようになった。

2. 研究の目的

本研究は、報告者の既発表論文における仮説を出発点に、先学によるこれまでの研究成果での理解を補足・修正する目的を持ちながら、「東三省」という語の起源だけでなく、その地域呼称への転化時期に関する再検討も行い、さらに、その検討を基にして、清代マンチュリアにおける「東三省」の形成過程をより具体的に検証していくという特色を持つものであるが、こうした本研究における具体的な目的・目標としてはまず以下の二点が挙げられる。

第一に、清代を通じ、清朝がマンチュリアという地域を如何なる領域として認識していたかについて、建国期から滅亡に至るまでの長い時期的スパンのなかで明らかにすることである。第二に、そのマンチュリアに対する地域認識が、18-19 世紀以降の当該地域における社会・経済的変動のなかで如何に変化していったかについて捉え直すことである。

さらに、こうした 2 つの目的・目標を達成できれば、以下のような 2 つの視座を設定できるようになるはずであると思われる。

まず、マンチュリアという地域に対する様々な地域認識に表現されていた 18-19 世紀の清朝によるマンチュリアの政治支配のありかたやその変化、清朝政府の動向を明らかにしつつ、そのうえで、当該地域の政治・社会・経済的変動についての再検討を試み、当該地域における「漢化」「中国化」「内地化」という歴史的経過に対する別の視点からの再検討を可能にしてゆくという視座である。

また、マンチュリアを一つの歴史的主体としての地域として見なすことを可能にする道を開き、当該地域の歴史的変動を単なる「辺境地域の中央への包含」過程として論じるのではなく、当該地域に内在していた社会・経済的変動と、外在的な国際的契機との双方に共に触れながら、清代マンチュリアの歴史を総合的に論じるための方法を構築するという視座である。

3. 研究の方法

前項のような目的・目標を達成するための方法として、本研究では以下の 2 点を設定した。

第一に、「東三省」その他の、マンチュリ

アを指す地域呼称や地域概念が、清代において（あるいは清朝にとって）如何なる用語によって表現されていたかについて、17世紀から20世紀初頭に至る時期（清朝が中国支配を行っていたほぼ全期間）のそれぞれの用法を網羅的に検討し、その用語の起源から地域概念としての転化へという時期的過程を確認する。

第二に、「東三省」その他の地域呼称とその意味的变化に表現された清朝のマンチュリアに対する地域認識の変化とその特徴を明らかにする。またこれに併せ、清朝の対マンチュリア政策の基調、並びにその背景となっていたマンチュリアの社会・経済変動についても可能な限りその検討を試み、清朝の対マンチュリア政策とその歴史的变化という視点から見た清代マンチュリアの歴史変動を明らかにする。なお、この過程では可能な限り、清最末期の「東三省建省」という行政改革とその歴史的意義についての再検討をも試みる。

4. 研究成果

まず、3.の研究手法以外の作業であるものの、本研究を推進していく過程で大いに参考になった作業の一つとして、近代のマンチュリア（満洲）における政治・経済・社会変動をトータルに論じようとする試みを提示している研究成果（研究書）の内容を検討した。これによって、本研究に密接に関連する近代満洲の社会経済的変動とそれに密接に関わっていた政治的変動に関する詳細な理解を得るとともに、清代後期から近代に至る時期のマンチュリアにおける歴史的変動の捉え方について考える機会を得た。この検討結果から生まれた、報告者の成果の一つとして、安富歩・深尾葉子編『「満洲」の成立—森林の消尽と近代空間の形成—』に対する書評を公表した。

さて、本研究では、マンチュリア（ほぼ旧満洲・現中国東北部を指す）という地域を示すとされる地域呼称や地域概念が、清代において如何なる用語によって表現されていたかを検討するため、またそれらの用語の起源から地域概念として転化していったその時期的変化を確認するため、既刊の諸史料（実録や地方志・档案類その他）を入手し、あるいは国内外の文書館が所蔵する未刊行の諸史料を収集などしたうえで、清代マンチュリアを指す地域呼称・地域概念となる「東三省」その他の語を含む記事をそれらの諸史料から抽出し、その文脈・用法・意味づけなどにも配慮しつつ、それら内容の確認と分析を行った。

なお、この作業過程で特に重視した点は、第一に、19世紀後半の清末の時期における「東三省」の語の分析のみならず、清初から18世紀に至る時期をも含み、清代のほぼ全時期の用例を確認したこと、第二に、台湾故宮博物院に所蔵されている未公開档案類を始めとする、国内外に所蔵されている未刊行の史料をも調査し、史料の網羅的抽出・分析を試みたこと、第三に、漢文史料のみならず、満文史料における当該語の用法にも配慮したこと、第四に、档案史料や官撰史料などの公文書のみならず、19世紀後半の清朝官僚・知識人のマンチュリアに対する地域認識を記す史料にも、少なからず調査を加えたこと、の4点である。

続いて、以上の「東三省」その他の語の抽出・分析という作業を踏まえ、諸史料における「東三省」の語とその用例・用法について概観しつつ、その用例・用法に垣間見える清代マンチュリアという地域の社会的・歴史的特徴、並びに清朝のマンチュリアに対する認識・政策などについて若干の検討を試みた。

この検討により、「東三省」の語の用例・用法の時期的な経過についてほぼ明らかになった点は以下の4つである。

第一に、「東三省」の語は、雍正末年から乾隆初年にかけてのジュンガル遠征の一つの契機として用いられ始めた語であると考えられ、主として軍営内の兵士集団の纏まり・区分を表現する際に用いられたものであり、「東三省」の語を地域呼称として用いた例はほとんどなかった。

第二に、乾隆年間後半の時期に入ると、なお盛京・吉林・黒龍江の三將軍の管轄下にある人的集団（官僚集団・兵士集団）を総称・省略した語として用いられ続けていたが、それに加えて、「東三省人」の語に象徴されるような、ほかの人的集団とは異なる文化的背景や軍事的技能を有するその特殊な存在を表現するものとしても「東三省」の語が用いられることが次第に目立ってきた。

第三に、さらに、同時期には領域的・空間的な概念をその用法のなかに色濃く含んだ「東三省」の語も散見されつつあったが、19世紀に入るとそうした用法が徐々に増加し、19世紀後半以降には「東三省」の語が清朝軍制・官制上の正式な呼称として用いられるようにもなった。

第四に、他方、マンチュリアに含まれる「盛京（奉天）」「吉林」「黒龍江」という語は清代の早くから地域呼称として用いられており、清代前半には、マンチュリアに対する清朝やその官僚の認識は、奉天も含む三將軍の管轄区域それぞれを基本的な地域的枠組み

とみなすものであったと考えてよい。

また、「東三省」の語の用例・用法のなかにみえる清代マンチュリアの社会的・歴史的特徴、並びに清朝のマンチュリアに対する認識・政策などの特徴や傾向について明らかになった点は以下の5つである。

第一に、18世紀を通じて、清朝は「東三省」の語をほとんど領域的・空間的な概念を示すものとして用いてはいなかった。つまり、清朝にとっては「東三省」は基本的にはマンチュリアそれ自体を指す呼称ではなく、また、他に同様の呼称もなかったことからみて、清代前半までは、清朝は一体的地域としてのマンチュリアを想定していなかった。

第二に、にもかかわらず、特に18世紀後半期には、特別な人的集団やその出身地域としての「東三省」という認識は清朝やその官僚のなかにあり、「東三省」の語はある特定の人的集団を指す語として基本的に認識されていた。

第三に、ただ、19世紀に入る頃からは徐々に、「東三省」の語は領域的・空間的な意味合いを含む語としても次第に用いられつつあり、19世紀以降、「東三省」の語は次第にマンチュリアという一つの地域を総称する名称として頻用されるようになってきた。

第四に、清朝や乾隆帝が「東三省」の語を三將軍の管轄区域の総称・略称として用いることをほとんど問題視せず、その語を多用したように、実際には省制が敷かれていなくても、「省」の語を公文書のなかで用いることは通常化していた。

第五に、したがって、18世紀には、マンチュリアに対する清朝やその官僚の認識は、奉天も含む三將軍の管轄区域それぞれを基本的な地域的枠組みとみなすものであったが、19世紀に入ると、その上位概念としての「東三省」という地域概念が徐々に形成され始めていったと考えてよい。

なお、以上のような分析・検討から得られた知見のうち、清初から18世紀に至る時期のそれに関するものについては、『清実録』のなかの「東三省」の語とその用例・用法——18世紀清朝の対マンチュリア認識との関わりにも触れながら——と題する小文として発表した。

因みに、その小文でもいくらか指摘したが、本研究を踏まえた今後の見通しとしては、以下の2点を挙げられよう。

第一に、マンチュリアは18世紀後半以降の時期になると、清朝にとっての重要性・特殊性を象徴する地域とみなされ、他の地域と明確に区別される地域としても認識されつつあり、そうした認識を象徴する語として

「東三省」の語があったことに注目すべきである。

第二に、「東三省」の語の用法とその含意に鑑みれば、「省」の語とその意味内容自体をどのように捉えるべきか、そして、「省」の語のマンチュリアへの導入の過程を如何なる歴史の反映として捉えるべきか、といった議論も浮かび上がるはずである。これまでの通説では、18世紀における「東三省」の語の出現は、この時期の、漢人世界とその価値観がマンチュリアに流入するという「漢化」「内地化」の歴史、あるいはその過程に対する清朝の対応の歴史を象徴するものとして説明されてきたが、本研究から得られた知見からみれば、その語は18世紀のマンチュリアにおける「漢化」「内地化」の歴史を直接的に象徴していたものではあったとは必ずしもいえない。18世紀のマンチュリアにおける「漢化」「内地化」の影響を受けて始めて「東三省」の語が使用され始めたのではなかったように、「東三省」の語は必ずしもマンチュリアの「漢化」「内地化」という歴史の流れだけを直接的に反映するものではなかったのである。むしろ、この「東三省」の語とそれが指す内容は、清朝がマンチュリアを認識する際に強調したその特殊性を表現するような歴史事象との関わりをなかで捉えていくべきである。

上記のような見通しにも触れながら、19世紀以降の「東三省」の語の用例・用法と、そこに垣間見えるマンチュリアの地域的特徴や清朝の対マンチュリア認識の変化などについて、2012年に発表した小文に続く別稿を作成する予定にしている。そこでは、18世紀から19世紀末に至る清朝の対マンチュリア諸政策、当該地域の社会・経済変動などに触れつつ、清代後半期のマンチュリアにおける歴史の変動の意義についても、より具体的に論じるつもりである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①古市大輔, 『清実録』のなかの「東三省」の語とその用例・用法——18世紀清朝の対マンチュリア認識との関わりにも触れながら——, 金沢大学歴史言語文化学系論集 史学・考古学篇, 第4号, 1-58, 2012, 査読無し

②古市大輔, [書評]安富歩・深尾葉子編『満洲』の成立—森林の消尽と近代空間の形成

一』, 社会経済史学, 第76巻第3号, 156-158,
2010, 査読無し

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古市 大輔 (FURUICHI DAISUKE)
金沢大学・歴史言語文化学系・准教授
研究者番号: 40293328

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし